

目次

1. はじめに
2. 振り仮名を取り巻く状況
 - I. 振り仮名、ルビとは
 - II. 振り仮名の歴史
 - III. 特殊なルビ、表現の為の振り仮名に関する先行研究
3. 調査方法について
 - I. 研究方法
 - II. 対象作品『とある魔術の禁書目録』について
4. 調査結果
 - I. 調査結果についての留意事項
 - II. 結果の簡易評価、注目点
5. 振り仮名の使用に関する考察
 - I. のべ数と種類数の差について
 - II. 人を表す振り仮名
 - III. 台詞内で使用される振り仮名
 - IV. 言葉の専門性について
 - V. 「その他」の振り仮名について
 - VI. 文単位の振り仮名について
 - VII. 振り仮名の使用法のまとめ
6. 振り仮名の価値
 - I. 特殊ルビを多用することによる影響
 - II. 振り仮名の表現機能の持つ価値
7. おわりに

1. はじめに

振り仮名、ルビの存在は私たち日本人が文章を読んでいく中で、もはやあって当然のものだといえるだろう。新聞にしても、雑誌にしても、小説にしても、ルビが振られている字を音読したならば、誰もが自然とルビに書かれた文を声に出すのだと思う。しかしながらあえて確認しておく、振り仮名とは単に漢字の正しい読みを示すだけのものではない。

振り仮名とは、日本で扱われる文字言語に漢字を代表とする表意文字、カナを代表とする表音文字の二つが存在し、その理解を補佐する為に使用された。日本語が言語であり、流動的なものである以上、文字と、それに付随する振り仮名も流動的な存在である。日本の振り仮名は現在に至るまで、「日本で使用される」文字を取り巻く環境の変化に伴い、その用途、役割を変化、多様化させてきた。

私が特に注目したいのは振り仮名の役割の中でも、文章における表現的役割についてである。これは後に詳しく言及する作品だが、「ライトノベル」と呼称される青少年を読者対象とした娯楽小説群(必ずしも読者対象と実際の読者が一致するわけではない)の一部で「漢字の読みとは全く関係のないルビ」の多用される作品を見たことがきっかけである。

無論、「読者が読みやすいように」「文字が読めずに困る事のないように」という意図も、ある意味表現上のものであるだろう。ただ私が思うのは、その振り仮名に込める「意図」が多様なものになっている、ということである。私が選ぶという形で限定した作品から、特殊な振り仮名に込められた表現上の意図を考えていくことで、その作品、作者が振り仮名に何を求めているのかを考察し、ひいては現在の振り仮名が持っている表現能力とその価値を確認することが今回の研究の目的であり、私が望むところのものである。

2. 振り仮名を取り巻く状況

I. 振り仮名、ルビとは

研究について触れていく前に、まず振り仮名、ルビという言葉が何を示しているのか、しっかりと理解しておきたい。

「ルビ」とは『広辞苑（第五版 岩波書店）』によれば「振り仮名用活字。また、振り仮名。（以下略）」とある。『日本国語大辞典』『デジタル大辞泉』でも同様の語義とされていることから、少なくとも現在、一般的には「印刷物における振り仮名の活字」、つまり「振り仮名」そのもののことを示すと考えられる。既に混用してしまっているが、この研究においても「ルビ」という言葉と「振り仮名」という言葉は同じものを指すことに断りを入れておく。では続いて、「振り仮名」という言葉は何と定義されているのか。先ほど挙げた辞書では「漢字の傍にその読み方を示すためにつける仮名。傍訓。」或いはルビと同義語である事などが示されているが、一般的な意味については『日本大百科全書(小学館)』の解説がわかりやすいので、ここに一部引いておく。

漢字の読みを示すために、その漢字の右側または左側、ときに両側につけた仮名。傍訓、付け仮名ともよび、印刷用語としては、ルビ ruby ともいう。～(中略)(以下用例を省略)～

これには（１）難読の漢字、固有名詞の読みを示すもの、のほか、（２）２通り以上の読みのうち一つを指定するもの、（３）漢字２字以上に和語１語を対応させるもの、（４）漢語の意味に相当する外来語をあてるもの、（５）漢語の右傍に読みを、左傍に意味を記すもの、（６）漢語に別の漢語の読みをあてるもの、があった。現在は（１）（２）以外は使用されることが少ない。（月本雅幸）

語義の一般的理解については今挙げた解説のもので問題ないだろう。上記には読みを示すもの、読みを指定するもの以外の用法が使用される事が少ない、とされているが、今回の研究で注目したいのは読みを指定する多数派の用法ではなく、少数派に属するとされるものである。

また普段思い浮かべる物とは違い、振られる語(あるいは文)が漢語とは限らず、振り仮名も「かな」とは限らない、つまり平仮名に漢字が振り仮名として振られる可能性もあることを付記しておく。ここでは振り仮名とは「文章を何かしらの点で補助することを役割に含む、対象となる文章の上下左右に記された文字あるいは文」を示している事とする。

また「ルビ」に、その文を強調する、注意を引くなどを目的とする傍点、傍線なども含めることがあるが、今回の研究の調査対象は先ほど挙げた「文字」とし、傍点、傍線は詳しい言及対象からはずすこととする。

II. 振り仮名の歴史

今回調査対象として扱うのは 2004 年出版された作品であり、現在扱われている振り仮名ではあるのだが、今に至るまで、振り仮名がどのように使用されてきたのかをここで踏まえておきたい。

「仮名」の起源は日本において、漢籍資料という外国語の文章、つまり漢文を理解しようという努力の流れの中に求められる。(※1)この、漢文を理解するために日本語の語順に沿って解読する、いわゆる訓読が行われる際、句点、返り点をはじめとして後にはかな文字を用いた送り仮名、振り仮名が施された。これら「訓点の記入」は『日本大百科全書』の「振り仮名」の項によれば 9 世紀初頭(平安初期)に始まったとされ、これが本文の理解を補助する機能を持っていることから、「振り仮名」の起源だといえるのではないだろうか。

以降、漢字が日本の文字として扱われる中で、様々な変化、工夫がなされていったものの、こと話を「振り仮名」に限るとその役割は「読み」を示すことに他ならない。しかしながら漢字が日本の文字として定着する、つまり漢字を日本人が理解するのが当然となるまでは、「読み」を示す事はすなわち「意味」を表すことと同義であったことには留意したい。

江戸時代になると振り仮名を取り巻く環境は大きく変わった。その原因は、細川英雄氏が「(江戸時代以前と江戸時代を) **区分した理由は、出版文化の出現・普及の、文章・表記への多大な影響である**(「振り仮名—近代を中心に—」1989)」と述べているように、一種類の本を数多く生産できるようになることで、文章提供者、つまり振り仮名を振る者が、「不特定多数の読者」を意識するようになったということである。仮名草子のような啓蒙を目的の一つとする書物を代表として、読者の持つ知識にあわせた文章を書く必要性が出てきたため、「読者の理解度」を意識して振り仮名が利用されるようになったのである。

明治期における変化で注目すべき点は「言文一致」である。細川氏は「実際に話されているのは振り仮名の部分であるという意識が口語と文語を接近させる大きな要因となっている」と述べている。つまり、元々補助的要素であった振り仮名だが、この時期に「漢字」が意味を、「振り仮名」が読みを、という分担形式の要素が強くなることで、文中におけるその重要度が増したと認識できる。明治期、翻訳小説は元々あったものの、西洋の言葉を日本語に訳さず使用する例が増えた。これらの言葉には、当て字に振り仮名を振る形をとることも多かったが、読者が重要視する(視線を向ける)のは当てられた漢字よりも、文字列が言葉として意味を持つ振り仮名であろう事を考えると、明治期にも振り仮名が重要性を増していた部分があると言える。

明治期の振り仮名を取り巻く環境の変化でもう一つ触れておきたいのは新聞の存在である。『萬朝報』『二六新報』を始めとする明治時代中期の日刊新聞は多くが「総ルビ(使用する漢字全てに振り仮名を振ること)」であり、これは文章理解を簡単にすることでより多くの読者を獲得しようという考えに基づくものである。この「総ルビ」は一時期、振り仮名が重用されたことを示すものの、当時の読者や後の評価者の受け止め方を見るに、しつこく使いすぎた側面も否めない。進藤氏(1982)が「きわめて非効率である。見た目もきれいではない。」と述べているように、これらの総ルビに対する反発があり、大正十年(1922)には東京、大阪の、合わせての 17 の新聞社が「漢字制限に付全国新聞社に御協議申上度」という檄文を出すという形で総ルビ新聞からの脱却を図る動きが起き、結果大正後期の新聞から総ルビは姿を消していった。

最後に、振り仮名に対する反動に注目しておきたい。この動きについて重要性を持つと考えられるのは、当時、国語審議会漢字主査委員会委員長だった山本有三氏が、昭和一三年『戦争とふたりの夫人(岩波書店)』のあとがきで

一つの文章をつづるに当つて、文字を二列に列べて書かなければ、
いつぱんに通用しない〜中略〜かういふままで放任しておくといふ事
は、まことに解しかねる次第です。

と述べ、振り仮名廃止に言及したことである。この意見は国語政策の振り仮名廃止の動きを活発化させた。あくまで結果的に、ではあるが、昭和二一年に内閣告示として発表された「当用漢字表」の「使用上の注意事項」には「ふりがなは、原則として使わない」とあり、国単位で振り仮名廃止の方向を示している。

振り仮名の存在に関しては、漢字廃止論や、常用漢字の問題、教育効果なども絡んでくるため少々複雑で、使用頻度を抑えるべきという考え方もあるが、いかに振り仮名の使用が減っても、完全になくなる事はないだろう。何故ならこの項目で触れてきたように、振り仮名もまた、言語と共に変化してきた文章技法のひとつである事は誰にも否定できない事実だからである。

(※1)今野真二氏は「漢文」と「中国語文」の二つを区別しているが、これは「変体漢文」と「漢文」の区別であるため、ここでは「漢文」として同様のものと扱う。(『振仮名の歴史』二〇〇九年、集英社)

Ⅲ. 特殊なルビ、表現の為の振り仮名に関する先行研究

この項では今までになされた特殊なルビ、振り仮名に関する先行研究についてまとめたいと思う。前項で述べたように振り仮名には長い歴史があり、当然のことながら振り仮名に関して言及している研究は少ないが、そのテーマを表現的役割に絞ると、あまり多くはない。これは勿論、どのような目的で振り仮名が使用された場合でもその意図に表現的側面が含まれる、という理由もあるのだろうが、そもそも文字の、「一般的に正しい読みを表さないルビ」(以降これらルビのことを「**特殊ルビ**」と呼ぶ)について、ルビを使う事で表現したい事象があるケースに言及する論文が少ないので、今回はそれに触れているものを挙げていきたい。

大島中正氏は「表記主体の表記目的からみた漢字仮名並列表記(1989)」の中で振り仮名をその文中での使用目的別に分けている。まずはこれを短くまとめたいと思う。大島氏は漢字表記部分(本文)に仮名表記部分(振り仮名)が従属するもの〈Ⅰ〉と、その逆であるもの〈Ⅱ〉に大別し、それぞれ4つ、2つに分けている。

- I-a 漢字の語形指定 1 別語に解されるのを防ぐため(大^{おお}事^{ごと}、兄^{あに}さん、日^ひ日^{にち}など)
- I-b 漢字の語形指定 2 意味は普通でも方言等特殊発音の表現のため(戦^{せん}争^そ、違^{ちや}うなど)
- I-c 漢字の読みを教えるため 1 (新しい言葉の習得) 読者の習得していない言葉の、漢字とその読みを示すため(固有名詞、辞書など)
- I-d 漢字の読みを教えるため 2 (知っている言葉の漢字表記) 読者の習得済みであろう言葉だが、漢字は知らない可能性のある言語の読みを示すため
- II-e 仮名の文脈での語義指定 「迷^{ラビリンス}宮^{ひと}、女^{はい}、侵^{はい}る」等、本来はその漢字を当てないが、当てて意味を指定するため
- II-f 仮名の文脈で指示する言葉を示すため 「大^あ陸^ち、伊^あ兵^に衛^にさん」等、仮名の指示するものを具体的にするため

加えて大島氏は e の逆、「漢字の文脈での語義指定」(禁忌など)、「漢字と仮名が対等関係にあるもの」(再^{ウォッチング}発見)の二パターンも「恐らく」存在するだろうとし、8 パターンに分けている。「従属」というと少々理解しにくいかもしれないが、つまり読み手にとって重要な要素はどちらにあるか、という事である。むしろ注意すべきなのは、この役割の分け方がやや読者か、文章を利用する側(教材など)の立場に立っている部分があることだろうか。必ずしも、読者が振り仮名をどう利用するかということと、書き手の振り仮名を振る理由が一致するとは限らない事は留意しておかねばならないだろう。

大島氏の研究は漢字に対する振り仮名に限られているが、今野氏(2009)はサザンオールスターズの『素敵な夢をかなえましょう』という

曲の歌詞の一部、「^{l e t i t b e}あるがままに」のように「あるがままに」というひらがなに「let it be」という英文がルビに振られているものを挙げ、「表現としての振り仮名」に言及している。これは触れている程度だが「歌」という表現要素が強い作品でこのような振り仮名が用いられている事に触れている事実は注目すべきであろう。

また岩淵匡氏も「振り仮名の役割(1988)」で振り仮名の用法について、複数の役割に分けて言及している。岩淵氏は目的ごとに形態、読み、表現、教育面の4つに分け、それぞれにおいて役割、用法を分けている。下記に挙げると

形態面 1 文中の補助 読みなどを示す基本的なもの

2 一体的役割 漢字が意味を、仮名が読みを示すようなもの
外国語訳も一部

3 主文の役割 地名など、当て字の振り仮名は漢字部分が意味
を持たないため

読み面 1 単純な読みを示す

2 読みを限定するために示す(漢字の語形指定)
3 特殊な意図の読みを示す(普通の読み方ではない)
4 読みが意味を持っているもの(当て字の振り仮名)

表現面 1 振り方を特殊にする(^{おちのび}脱出ではなく^{おちのび}脱出する、とする)

2 話し言葉を振り仮名とする(「未知数」に「わかんない」と振る、等)

3 振り仮名の意味を漢字が説明(「異空間」に「どこか」と振る、等)

4 登場人物に対する振り仮名(^{ヴィーナ}少女、^{ゼナ}姉など、人物説明もかねる)

教育面 未修得の読みに対する振り仮名

となっている。一つの振り仮名は複数の役割から考えることが可能であり、複数の意図が一つの振り仮名に込められる事があるという事を明確にしている。

これらの先行研究は、振り仮名の表現を考えるうえで大変参考になり、意義のあるものではあるのだが、大島氏、今野氏は論を進める中で結果的に「特殊ルビ」に触れた形であり、その役割についての詳しい言及はなされていない。岩淵氏は表現面の役割を持つ振り仮名の例として、特殊ルビの口語的な表現を目的とするものを挙げていらっしやり、これは必ずしもそれ以外の振り仮名が表現的な役割を持つ事を否定するものではないのだが、やや分類が偏っているようにも受け取れてしまう。何故なら厳密に表現面での役割、という形で分類を行った場合、氏の挙げた例は先にも述べたように口語表現の補助を目的とするもので、その中で「形態面」での差異で分類してしまっている部分があるからである。勿論この差異についても分類が必要ではあるが、役割の分類を論の目的とするならば「難解な表現を補助するため」「世界観を補強するため」など、表現上の**目的ごとの分類**もあった方が望ましかったのではないだろうか。大島氏、岩淵氏の研究における一番の問題点は、振り仮名を振られる対象が「漢字」に限定されてしまっていることにある。これは、論の主目的が振り仮名の表現能力に対するものでない以上、また、論文が書かれた年代を鑑みれば致し方ないことではあるのだが、現在の振り仮名の能力を網羅するには、いささか漢字に対するものだけでは示しきることとはできないというのが私の考えである。

しかしながら、振り仮名の表現要素に触れているという点のほか、その例として扱っている語を『魔獣戦士ルナ・ヴァルガー』の一卷(秋津透 1988 角川書店)という角川スニーカー文庫から出版された「ライトノベ

ル」として分類できる作品から引いてきていることも、非常に興味深い。何故この作品を例として挙げたのかという解説はなかったものの、少なくとも「ライトノベル」と「表現方法としての振り仮名」の親和性を岩淵氏が見出していると言えるだろう。

先行研究は以上に挙げたものが主なものである。最初に述べたようにあまり数はないが、岩淵氏の行ったものをはじめ、役割を分類して考察する方法は非常に参考になる。次項で実際にどのような調査を行い考察するのかに触れるが、先行研究においては対象とする振り仮名を不特定多数の文章から例をとって考察していた為に、やや書き手の意図や、その背景などの考察を断念せざるを得ない部分があるように思える。今回の研究ではこの点にも注目して、振り仮名に対するアプローチを図っていききたい。

3. 調査方法について

I. 研究方法

今回の調査では対象とする文章を一つの作品に限定し、作者がどのような表現上の効果を期待して振り仮名を使用しているのか考えていきたい。調査対象とする作品は、鎌池和馬著『とある魔術の禁書目録』（アスキー・メディアワークス、2004.4）。シリーズ作の一卷目を対象にする。この作品については後の項で詳しく述べる事にするが、調査対象作品とした理由は、私が特殊な振り仮名に興味を持ったきっかけの作品であり、実際に特殊ルビの使用頻度が非常に多い事が一つの特徴となっている作品の為、データを多くとることが見込めそうだからである。勿論、一つの作品からのみのデータである以上、この作品以外の「表現上の目的」を示すものではないが、当初の目的である「現在の振り仮名が持つ表現

能力」がどのようなものか確認する事は可能であると考えた。考察上、必要に応じて他作品を比較対象例としてあげることにはあるが、研究対象としてはこの一作品に限るものとする。書籍そのものと、内容に関しては後に述べる。

収集するデータは対象書籍の「特殊ルビ」一つに付き、「ルビ」と「ルビがふられた対象の文」(以降、先行研究の大島氏に倣い、ルビ部分と区別してルビを振られる方を「**本文**」と呼ぶ)、「使用ページ」、「本文との関係」をデータに取り、推定される使用意図などを分析して行きたいと思う。特殊ルビに限定する理由としては、「正しい読みを示す範囲内で行われる表現はあくまで付加的なものであり、作者が表現そのものを目的とするものではない」と考えたからである。「作者が本文に漢字を使用したい」という意図で、その漢字に対する補助効果を望んでいる、と解釈する事も可能だが「現在の振り仮名のもつ表現能力」としてはふさわしくない。よって、文脈上特別何か表現したいという意図が認められる場合以外、特殊ルビのみを調査対象とする。データの留意事項は結果分析の項で言及することとする。

II. 対象作品『とある魔術の禁書目録』について

調査結果の前に、調査対象である『とある魔術の禁書目録』という作品について、作品の基本事項と簡単なあらすじを挙げておく。

『とある魔術の禁書目録』(「禁書目録」には「インデックス」とルビが振られる。)は、電撃文庫(アスキー・メディアワークスのライトノベルレーベル、言い換えると販売用商標)から出版されている、鎌池和馬著、挿絵を灰村キヨタカが担当するライトノベル作品のシリーズである。第一巻の出版が2004年4月からであり、以来2011年12月10日

までで 28 冊発行され、まだ完結していない作品。2011 年 8 月の時点でシリーズ累計 1230 万部発行されており、漫画、ゲーム、アニメ化も行われている、いわゆる大ヒット作品である。

今回の調査対象作品として、「ライトノベル」と呼ばれる書籍の中でもとりわけこの作品が相応しいと考えたのには、既に述べたが私的な点として私が「振り仮名」に興味を持ったきっかけの作品、ということもあるが、そもそもこの作品の特徴に、大量の特殊ルビが使用される、ということが第一にして最大の理由として挙げられる。第 1 巻はおよそ 300 ページだが、その中に 274 種類もの特殊ルビが振られている。これはあくまで種類であり、同じ使われ方をしている物は数えていないため、延べ数はさらに多い。加えて同作者の別作品である『ヘヴィーオブジェクト』シリーズ(2009 年 10 月～)には見られない特徴なので、意図的に行われていると考える事ができる。また、この作品は三人称で描かれる作品であり、俯瞰視点での描写がある、という点も理由の一つに挙げたい。一人称作品を調査対象から避けるのは、「地の文が視点人物による語り」という形式をとるため、表現上口語補助の理由を持つ振り仮名が多くなってしまいがちになると予想されるからである。あまり発行部数の多くない作品を調査対象として選ぶことの意味は否定しないが、人気があり、読者からの評価も受けていると判断が可能であれば、調査対象となる文章が不特定多数に向けて発信され、享受されているという前提を持つ事が可能なので、幾分調査しやすいという点も理由の一つである。

ストーリー、内容について述べると『とある魔術の禁書目録』は「ライトノベル」であり、つまり内容における娯楽的要素が非常に強いという点が挙げられる。無理矢理ジャンル分けをするならば「バトルと SF とファンタジー」と表現することになるだろう。しかし、ある部分では

ラブコメのようであり、ある部分ではギャグ作品のようでもあるため、明確に区別して評価する事は不可能に近い。これは同年代の「ライトノベル」作品によく見られる特徴であり、2000年代のライトノベルの典型的作品としてみることができる。

一巻の簡単なあらすじを以下に記すと

超能力が科学的に認められている世界において、技術の開発、研究の最先端を担う学園都市。その街では多くの学生が超能力開発を含む授業を受けている。7月20日の夏休み初日、街に住む高校生「上条当麻(かみじょうとうま)」はイギリス清教のシスター、名前として「禁書目録(インデックス)」を名乗る少女と出会う。彼女は世界には魔術が存在し、自分は魔術師に迫われていると説明。上条は疑念を持ちつつも少女を保護し、数度の戦いに巻き込まれた結果、最終的には知識以外の記憶を失うことになるものの、少女を救う事に成功し、主人公は少女の笑顔を守るべく、記憶を失ったことを隠すことにする……

といったものである。

4. 調査結果

I. 調査についての補足、詳細

さて、調査結果については付属の表のようになったのだが、結果について言及する前にいくつか説明を加えておきたい。

まず調査方法について、対象書籍はあとがきを含めず全 294 ページある。しかしながらこの作品は、本文前にカラーイラスト、目次が数ページに渡り載せられており(※2)、本文は 10 ページ目からである。今回の

データ取得対象とする文は、『とある魔術の禁書目録』の本文である 10 ページから 294 ページまでとしている(※3)。つまり、作品本文中で記される章題に対する振り仮名は対象とするが、目次、イラストに付随して載せられる文章、作品タイトルへの振り仮名はデータ取得対象としないということである。今回データに影響が出るのは、作品タイトルをはじめとする本文以外で「禁書目録」へ「インデックス」とルビが振られる部分と、カバー袖に記される作品紹介文章に含まれる「魔術」に「オカルト」とルビが振られる部分、文中の振り仮名の総数に対してだが、ここで明確にしておきたい。

取得するデータについては漢字の字典に掲載される様な、読みを示しているとは考えられない「特殊ルビ」に対し、単語ごとに「振り仮名」と「振られている本文部分」「掲載ページ」を記録し、その性質について、

1. 「登場人物の発語したものか」について、違う、「」で囲まれた台詞、「」で囲まれていないが、登場人物の心情が描かれているなど、ほとんど性質が台詞と同じもの(以降「準台詞」と呼ぶ)の 3 つに分類。
2. 「作品内のみ存在する言葉(造語)であるか」について、違う、本文振り仮名ともに造語、本文のみ造語、振り仮名のみ造語、の 4 つに分類。
3. 「作品内で、本文と特殊ルビの組み合わせが固定されているか」について、違う、固定されている、固定されていないが固定して使用している場面がある、の 3 つに分類。
4. 「本文と振り仮名の関係」について、別言語翻訳、(作中限定含め)同義語、(砕けた)口語、作中で固定化された関係、指示語(人称代名詞)、本文の具体名、本文の抽象呼称、その他の言わばユーモア関係、の 8 つから可能な限り最もふさわしいものに分類、難しいようであれば 2 つ当てはめる。(※4)

と区分し、振り仮名がどのように使用されているか考えられるようにした。分類は私の判断で行った。

各区分項目を設けた理由についてだが、前述の岩淵匡氏の先行研究が、唯一表現面の振り仮名について分類を行っているため、その、振り仮名の機能を分類したものを参考にして「本文と振り仮名の関係」の分け方を作成した。ただし、氏の分類は形態面、表現面についてやや中途半端に感じたため、「振り仮名が、本文にとって何なのか」ということに集中して分類した。また、「最もふさわしい」分類を行うことでデータ上は反映されていないものもあるが、口語要素、造語要素、作中における「決まりごと(ルール)」の要素が、その使用において含まれているものが多いことを鑑みて、それぞれ専用の分類を行い、振り仮名表現の大まかな傾向を掴むためである。

また、単語単位で抜き出すことがふさわしくないと考えられるものについては「文」として別にとりあげ、分類、考察も単語に対するものとは別に行うこととした。文は、「」記号で区切られるか、句読点を以て「一文」と数えることとした。単語データと違い、一つあたりが長いので横書きになってしまっているがお許し願いたい。

また、全てのデータについて、そののべ総数と種類数(※5)を記録した。断っておきたいのは、分類そのものが目的というわけではなく、分類することで特殊ルビの使用のされ方に何かしらの特徴が見いだせないか、という「試み」である。よって、これらの分類自体は表現に依存するものではなく、形態面で分類を行っている。

(※2) この形式は『とある魔術の禁書目録』に限らず、多くのライトノベルでとられる形式であり、他の出版レーベル、出版社の書籍でもよくみられる。

(※3) 本文中にもイラストが数回挿入されているので、実際のデータ取得対象ページ数はさらに少ない。イラスト一回につき一ページ丸々使用し、文字が描かれるようなことは無いため、これが理由で除外した例は無い。この挿絵についても、多くのライトノベルでとられる形式である。

(※4) 先行研究の部分で触れたが、一つの振り仮名に複数の意図が込められることは多々あるため、全て拾っては煩雑になる。この分類では最も意識される関係をとりたい。二つ当てはめるものは、一つに限定するとその文中での働きへの評価に語弊が生じるものである。

(※5) 「種類数」とは、同じ文字の並びの本文に対し、同じ文字の並びの振り仮名が振られた組み合わせを「一種類」と数えたものの数である。

II. 結果の簡易評価と注目点

では、実際の結果について言及していきたい。それぞれ分類した振り仮名の「数」をまとめた表にも記しているが、作中にはのべ 1929 単語 720 種類と 14 文 11 種類の振り仮名が使用され、そのうち 467 単語 274 種類と、文に対するものすべてが「特殊ルビ」だった。それぞれの振り仮名と、その分類については付属の表を見ていただければいいのだが、いかんせん数が多いので、特に考察したい点について下記にまとめ、次項でそれぞれについて考察し、それらの観点から「振り仮名がどのような働きをするために使用されているのか」ということに言及していきたいと思う。振り仮名を抜き出した表については上から使用されるページ順 (※6) に並べており、以降、例示し参考にする際どのページに出る振り仮名かも併記するので、参照の際に利用していただきたい。次に、特に考察したい点についてまとめる。

注目点 1 : のべ数と種類数の差について

～繰り返し使用される振り仮名 固定関係と造語～

注目点 2 : 人を表す振り仮名

注目点 3 : 台詞内で使用される振り仮名

～登場人物が「話す言葉」の表現～

注目点 4 : 言葉の専門性について

～「ロンギヌスの槍」は誰でも知っている言葉か～

注目点 5 : 「その他」の振り仮名について

注目点 6 : 文単位の振り仮名について

以上 6 つの点について分けて考察し、それぞれに当てはまる振り仮名について、その役割、どのような理由で使用されているのかを考えたい。

(※6)同じページで使用されるものであれば、そのページ内で使用されるのが早い順(つまり行番号が小さい数順)に並んでいる。

5. 振り仮名の使用に関する考察

I. のべ数と種類数の差について

～繰り返し使用される振り仮名 固定関係と造語～

のべ振り仮名と種類の数に注目すると、単語振り仮名は一種類につき平均 2.68 回使用されたということになる。一方、特殊ルビのみでは平均 1.70 回使用されている。この平均は単純にのべ数を種類数で割ったものであり、あくまで『とある魔術の禁書目録』という作品のみでしか参考にはならないが、まずはこの差について考えてきたい。

全体を平均したものだけを見てしまうと、特殊ルビがつく言葉は同じものが繰り返し使われることが少ない、と思えてしまうが、もちろんこの認識は間違っている。項目ごとの振り仮名ののべ数と種類数を見てい

ただければわかるのだが、その比は分類によって著しい差があるといえる。特にその差が顕著なのは「作中固定関係がある」と分類された振り仮名である。のべ数では「一部に固定関係がみられるもの」を含めれば、その数は「作中固定関係がない」ものより多く存在するのに対し、種類数では「無い」ものの数がほとんど変わらず、「ある」ものは四分の一程度になっていて、作中で複数回使用される特殊ルビはほとんどこちらに分類されていることがわかる。また母数自体は減るが「造語」として分類されたものに関しても、のべ数と種類数の差が顕著であり、振り仮名、本文ともに作中で作られた言葉に至っては、作品内で平均すると9回以上使用されている計算になる。むしろ今あげた二つに分類されるもの以外は平均使用回数が2回をきっているので、この2項目にあてはまる振り仮名が特別である、ということになる。

ここで「作中固定関係」について再確認しておきたい。これはつまり、特定の単語に対し特定の振り仮名が振られることが作品内で「お決まり」になっているもの、あるいはそのように見られるもの、ということであり、つまり元よりこの分類に入るということは複数回使用される傾向であるということなのだが、ではこのように「何度も使われることが前提となっている特殊ルビ表現」とは一体どのようなものなのだろうか。

本文中のこれらの振り仮名が使用されているもののおおまかに分けると、

1. 作中内のみで限定的に存在する「もの」の名称

(造語だけではなく現実中存在する言葉で表現されたものを含む)

2. 本文の単語の「訳語」

という2パターンにできる。

例えば1に分類できるものの例としては「^{イマジンプレイカー}幻想殺し」(p21～)
「^{カリキュラム}時間割り」(p15～)などがあり、2に分類できる例には「^{リアル}現実」(p35～)

リミット」(p206～)「^{ぜったい}法王級」(p48～)などがある。

それぞれのパターンについて考えてみると、1 の例として出した
^{イマジンブレイカー}「幻想殺し」という言葉だが、これは主人公の持っている超能力につ
けられた「名前」であり、当然ながら現実には存在しないものである。

また、^{カリキュラム}「時間割り」という言葉は本文、振り仮名ともに現実に存在する言
葉ではあるが、作中では「超能力を発現、成長させるために組まれた特
殊課程」を指している。つまり、作品内限定で言葉の意味を増やしてい
るのである。近い用例に^{ジャッジメント}「風紀委員」が存在するが、これは振り仮名の
みが造語であるものの、決して本文の単語が現実を示すものと「完全に」
同じものを示すわけではない。

このように、作中固定関係のある振り仮名は作品内で新しく生み出さ
れた存在、概念の名称なので、本文に複数回でてくることは当然とも言
えるのだが、それらの言葉に特殊なルビを使用することによる「効果」
が存在する。

一つには、「語意の理解と世界観に適応した呼称の両立」である。本作
は近未来の日本が舞台であり、SF、ファンタジー要素を多分に含むため、
それらを構成する要素に付ける名称に和語、漢語を使用してしまうのは、
どうにも雰囲気にとぐわない。かといって、カタカナ語のみにしてしま
うと意味が通りにくい。よって、「意味を本文、読みを振り仮名」という
形式をとることで、新しく出てきた言葉の意味を、読者が理解しやすく
する機能を果たしていると考えられる。これはある意味、本文が振り仮
名を補足する、主客逆転ともいえる機能だろう。

またこのような特殊ルビ表現は少なからず強調効果、読者の注意をひ
く機能を持つだろう。よって、これら振り仮名をつけられた「作品内で
生み出された」言葉が「特別な言葉である」という事実を表すことで、

作品世界の独特さを印象づける機能もあるだろう。

現実に存在する言葉に対し、付加的に意味をもたらすような使用法はこれらの応用あるいは一步手前であり、「もともとその言葉が指す概念に近いモノ」として扱ってもらえば理解しやすく、特殊ルビを使用することで「近いけど**違うモノ**」ということを明確化しているといえる。(※7)

2 の例については、これらは作品内限定の「意味」で使用されているわけではない。単に本文を英訳したものが振り仮名となっている場合が多く、これらの振り仮名も言葉の「意味と雰囲気」の両立の機能を持つとみなすことができる。ただし「発言者の意図する意味と発言した言葉そのもの」という役割を本文と振り仮名でわけの使われ方もあり、この使用のされ方が顕著に出ているものが「法王級」などの単語である。この使い方に関しては、後に「台詞内で使用される振り仮名」について考察する際に、まとめて触れたいと思う。

さて 2 の例に関しては、全体でみれば特別多用される理由があるわけではない。そもそも平均でみれば使用回数が多いものの、作品内で注視する程使われているのは「制限時間」「奇跡」(p21～)「^{セント}聖」(p60～)など、数単語に限られる。「^{セント}聖」はこの言葉がつく名詞が多用され、その他の言葉は「作品内、あるいは特定場面において、特別使用回数が増えている」と考えられる、ある種「話の鍵」となる言葉とも解釈できる。

1, 2 共通して言えることは、特殊なルビが使用されている単語の中には、作品においてある程度重要な要素を持つ言葉が存在し、ゆえに多く使用され、種類数に対するのべ数が多くなる、ということである。

まとめると、作品内で多用される言葉は必然的に作中である程度の比重を持つ要素となり、それらにつく特殊な振り仮名は「作品内で使用される言葉として、雰囲気に合わないものにする」と意味の理解を速や

かにすることを両立する役割」と「存在の強調の役割」という二つの役割を主として使用されていると考えることができ、特に作品内でのみ存在するモノに対する名称に付随したときに顕著にみられる、となる。

(※7)本作にはなかったが、『境界線上のホライゾン上(川上稔 電撃文庫 2008.9)』には「伝纂器」^{P C}「術式鍵盤」^{キーボード}など、本文のみ造語の「もともとその言葉が指す概念に近いモノ」を示す単語もある。この場合当然「もともと」の語は「振り仮名」の方である。

Ⅱ.人を表す振り仮名

次に「人を表す振り仮名」についてみていきたい。この言い方ではどのような振り仮名が当てはまるのかわかりにくいかもしれないが、要は「人称代名詞」か「登場人物名」(またはそれらの本文に振られる)の振り仮名である。小説において登場人物という要素は重要なものである。先行研究に挙げた岩淵匡氏も、振り仮名の機能を分類した際「表現面の機能」として「登場人物に対する振り仮名」を挙げていることから、注目されるべき役割を持つといえるだろう。本項では、それら人物を示す振り仮名がどのような機能を持っているか、詳しく考えたい。

付属の表には人を表すかどうかについては触れていないが、ここでその総計を紹介しておきたい。特殊ルビを除くと 15 種類 285 回使用されている。(※8)ただし、これらの単語が指す人物は 6 名に過ぎず、さらに主人公である上条当麻に対するものが 202 回を占める。ただし、同じ漢字、同じページであっても振り仮名が使用されることもあれば、使用されないこともあり、その法則も見出せなかったので、「見栄え」など感覚に従っている部分もあるのかもしれない。

一方、特殊ルビを使用したものだが、後に解説する事情により正確な

数をきっちり言及することが少々難しくなっている。人に対するものであると推測できるものも含めると 21 種類 37 回使用されている。通常の振り仮名のものと比べると数が少ないということもあるが、そのうち 10 回は 1 種類に集約しているので、全体の傾向としてはこれらの振り仮名は繰り返し使用される類の振り仮名にはあたらないといえるだろう。

これらも少ないながら複数の形式が存在するので、分けて考えたい。

1. 人名が振り仮名
2. 人称代名詞が振り仮名
3. 本文が人名であるもの(文脈上そうと考えられるものを含む)

と、3 パターンがある。

まず 1 についてだが、これは 4 種類 4 回使用があった。少ないので全てあげてしまうと、「部外者」(p120)「^{インデックス}魔術師」(p244)「^{スタイル}現 実」(p268)「^{インデックス}炎の魔術師」(p281)の四単語となっている。挙げた形式の中でも最も使用回数が少なかったのだが、岩淵氏が先行研究で指摘している形式と全く同じであるため、最初に触れたいと思う。

岩淵氏はこれらの本文、振り仮名の関係について「人物説明も兼ねる」と説明していらっしゃり、私もその機能があると考えます。さらに詳しく言えば、文脈上、振り仮名の人物の、「本文」の要素が重要となっており、そこを強調する用法だといえるだろう。

調査対象から文例を挙げたい。p120、2 行目に「^{インデックス}部外者が入院したとなれば、あっという間に情報は洩れる^も」という文がある。前に記したあらすじも参考にさせていただける理解しやすいかもしれないが、ヒロインの「インデックス」という名前の少女は舞台となる「学園都市」の外の人物であり、その彼女が入院するとその存在がすぐに知れ渡ってしまう、ということであり、「インデックス」という存在の、「部外者」とい

う要素を強調しているとみることができるし、もちろん「インデックス」は「部外者」である、という解説でもあるだろうし、ここでの「部外者」は「インデックス」のこと、という補足でもあるのかもしれない。少々混乱してしまう書き方かもしれないが、おそらく文章上意味の通りやすい「部外者」という言葉と、その言葉が正確に指す人物を両立させる使用法なのではないだろうか。

くどい説明かもしれないが、ここで指摘しておきたいのは「説明」「解説」というように、一つの振り仮名の機能を一つだけきっちり指摘するということは、こと特殊ルビについては不可能であり、上記のように並列して解釈すべきであると私は考える。

次に2の形式について考える。こちらは13種類19回使用され、3つのパターンの中では一番使用回数が多かった。例としては「^{おれたち}超能力者」(p152)「^{わたしたち}凡人」(p190, 191)などがある。

こちらも機能としてはパターン1とほぼ同じである。振り仮名にあたる存在の、本文要素を強調する用法を含むことは間違いないが、1と違い、全ての振り仮名が登場人物の「台詞内」で使用されている。そのため、「登場人物同士の会話上で使用される人称代名詞が何のことを指すのか、登場人物同士では暗黙の了解の状態である」が、読者にとってはそうでない可能性があり、その場合の意味の理解を完璧にするという役割と「登場人物の話す言葉としてふさわしい」ものを振り仮名として使い音声部分を担当させているととれるものがある。「^{デメエ}自分」(p222, 289)のような用例は、主人公である高校生が発する乱雑な言葉づかいの表現と、二人称だと理解を間違えないための補足との両立であると解釈できる。

台詞内で使用される振り仮名については注目する点であげており、後に別の項目にてそれ専用で触れるので、ここではその機能は上記程度に、

簡単に述べておくに留める。

要するに 1 と同様の機能に加え、口語であるため登場人物の認識や個性を使用される言葉へ影響させた用法が、この形式にあたるのだろう。

最後に 3 の例についてである。前述の 2 つとはやや異なるこの形式をとったのは 4 種類 14 回であり、そのうち 10 回は「^{インデックス}禁書目録」(p30～)である。他に「^{イマジンプレイカー}幻想殺し」(p74)「^{レールガン}超電磁砲」(p74)「^{ビリビリおんな}御坂美琴」(p78, 94)を、この形式として扱っている。一緒くたにしてしまっているが、実のところこの用例はその他、という色合いが強い。ただ前述の「特殊ルビの人を表す振り仮名の使用回数がはっきりとしない」のは、「^{インデックス}禁書目録」という言葉の意味の解釈が、複数とれる場面がいくつか存在するからである。この言葉は、作中初めて使用されるときヒロインの少女の自称であり「人名」であるが、もう一つ「10 万 3000 冊の魔道書が保管された図書館」という意味も持つ。このどちらを指しているのか微妙な部分があるので「はっきりしない」としたのだが、全 17 回の使用のうち、10 回は人名として使用していると解釈できるため、ここではそのようにしている。(※9)「^{イマジンプレイカー}幻想殺し」「^{レールガン}超電磁砲」も作中内で必ずしも人を指すとは限らない言葉であり、前者は超能力につけられた名称、後者は現実に存在する兵器概念の名称と超能力につけられた名称が主たる意味なのだが、本作では p74 に一度だけ、「それを使用可能な人物名」の代わりにこれらの言葉が人を表す単語として使用されている。

これら 3 つの単語については、先の項で触れた「固定関係のある振り仮名」であるため、振り仮名の役割もそちらに従ったものであり、振り仮名の問題から離れてしまったかもしれないが、作品内限定で意味を新たに付加された言葉は振り仮名との関係が密なため、ここで解説することにした。

もう一つ、「御坂美琴」^{ビリビリおんな}という言葉、これは一種類のみだがしっかりと
と言及しておきたい。というのもこれは今まで触れてきた2つの形式と
は違い、「要素の強調」という役割を一切持たないからである。前の二つ
では登場人物を表す、指定するものとして強いのは振り仮名の方であっ
たと思う。しかし、こちらの場合本文が人名であるため明らかに**本文が**
人を指定している。振り仮名はあだ名に近いだろう。この用法は、使用
場面における視点人物の認識を大きく影響させたものだと考えられる。
この例の場合、視点人物は主人公である「上条当麻」であり、「御坂美琴」
という登場人物に対しては雑な対応をとり続けたあげく「ビリビリ」と
いう呼称をつけた、という背景がある。この作中内で設けられた前提を、
今回とりあげている単語使用場面まで引きずらせた結果、人名の本文に
対し、あだ名を振り仮名に付ける、という表現につながったのではない
かと思う。読みの補助という観点からいえば、登場人物名というものは
なかなか覚えにくいという前提のもとに、人名に対してその人物を端的
に表す言葉をあだ名として付加したとみることも可能だろう。今回の調
査では数こそ少なかったが、重要視したい振り仮名の表現である。

人を表す振り仮名についてまとめると、この作品では大別すると「振
り仮名の指定する存在の、本文要素の強調の役割」「本文の人物が誰なの
か特定(読解補助)する役割」「話者、視点人物の使用する言葉としてふさ
わしいモノを担う役割」の3つの役割を果たしており、振り仮名と本文
のどちらがより強く特定対象を指定するかで、その役割に差ができてい
る、といえる。振り仮名をあくまで補助的な機能を担う存在であるか、
主文と同等とみるかによって役割の解釈も大きく違ってしまいが、個人
的には振り仮名がより多くの機能を持つことが前提であるため、振り仮
名の方が文章上重視されるとしても、問題ないをしたい。

(※8)同一人物の「苗字のみ」「名前のみ」「苗字と名前」の使用は別単語として扱っているため、「上^{かみじょう}条^{とうま}」「当麻^{かみじょうとうま}」「上^{かみじょう}条^{とうま}当麻」は三種類である。

(※9)人名としての「禁書目録^{インデックス}」については、むしろ「インデックス」という表記が多用される。これは基本視点人物である主人公が作品の大半で「禁書目録^{インデックス}」を呼称としてしか理解していないことを表現するためと考えられる。

Ⅲ. 台詞内で使用される振り仮名～登場人物が「話す言葉」の表現～

この項では「台詞内で使用される振り仮名」、登場人物が発言した単語に付いた振り仮名について扱っていきたい。この分類についても岩淵氏の先行研究を参考にして項目を設けた。岩淵氏は「話し言葉」とまとめてしまっているが、会話文内で使用される振り仮名にはそれ以外の役割も存在すると考えられ、その分析を求めてここで項目を設けている。結果、台詞内で使用されていないものが 85 種類 147 回、括弧内で登場人物の台詞、心情として使用されたものが 157 種類 262 回、台詞に準ずる、文の中で使用されたものが 32 種類 58 回である。

数字に対して所感を述べる前に、「準台詞」について述べておきたい。分類について説明した際に「心情などが描かれた台詞に性質の近いもの」としている。つまりは地の文(括弧でくくられていない文)の、登場人物(主に視点人物)が話しているような部分で使われているもので、その性質は限りなく台詞に近い。もともと『とある魔術の禁書目録』という作品は地の文が登場人物に近い立場で、たびたびその心情が浸食してくる。これは作品の一つの特徴でもあり、まとめて「台詞」としてもこと振り仮名の考察に影響はもたらさないので、ことこの「台詞内の振り仮名」の項においては同じ分類と考えていただきたい。

数字に戻ると、結果として 2/3 を超える特殊ルビが台詞内で使用されている。また種類数でも同様の比を保っており、台詞内で使用されるものが地の文で使用されるものの倍以上存在するのは明らかである。

前提として、ライトノベルと呼ばれる小説は会話文が多く、先に述べたように本作は地の文でも台詞と同等のものが存在する。見開き 1 ページほとんどが会話で埋め尽くされている部分も決して少なくないので、下手をすればこの比がそのまま作品内の、純粋な地の文と台詞の文量の比、という可能性もある。つまり、「台詞内の特殊ルビが多い」という事実がそのまま「特殊ルビは台詞内を中心に使用される」ということを示すわけではない。実際、「台詞内で使用された言葉につく」ことが特殊ルビの使用とあまり関係しないものも多く、厳密に「登場人物が話した言葉」について表現を加えたいものに限ると、データの数上の量は減るはずである。念のため、作品のはじめ(p10)と終わり(p294)、p100、p200 からそれぞれ 10 ページに渡り行単位でおおまかに台詞の文量を調べたところ、地の文のものも合わせて 646 行のうち 242 行相当だった。特に少ない場面を調べてしまった可能性もあるが、ひとまず台詞文の方が圧倒的に多いわけではないということが示せたと思うので、台詞内で使用される特殊ルビの重要性は証明されたということにしたい。

前提を述べることに多く行を割いてしまったが、本題の振り仮名の役割について考える。台詞中で使われる特殊ルビを大まかに分けると

1. 「振り仮名の文字」が発声された言葉である場合。
2. 「本文の文字」が発声された言葉である場合。

の二つの形式にすることができた。

まずは 1 の形式を、と例を出して話を進めていきたいが、実のところ 2 の形式である、と判断できるのは三例のみで、ほぼすべてがこちらの

1 の形式であった。振り仮名の一般的用法が「読み」を示すものであることを考えるとこの割合は不思議なことでもないのだが、2 の形式が存在する以上、分けて述べたい。前の項目Ⅰ、Ⅱで触れたまま後に述べるとした「^{ぜったい}法王級」、「^{デメエ}自分」などもこちらの形式にあたり、他には「^{レイズしろ}受けて立て」(p228)「^つ痛」(p121,148)「^{デート}交尾」(p98)などがある。

これらの単語は、本文に発言した登場人物(話者)が伝えようと意図した意味の言葉、振り仮名に実際声に出したであろう言葉、というように分けて表現されたものである。単純にどのように機能しているかを言ってしまうとこれが全てなのだが、この1の形式は「特殊ルビの使用意図」という観点からさらに2つに分けることができる。

というのも、「登場人物の性格や場面の雰囲気上、**振り仮名の言葉を発声させたい**が、そうすると**読者に伝わりにくい面がある**ので本文と分けた」ものと「登場人物の性格や場面の雰囲気上、**本文の文字を使用したい**が、そうすると読者に加え、**作中での会話対象にも意味が通じづらい**ので特殊ルビを使用した」ものの二つである。くどいので語弊を恐れず簡潔に言えば、振り仮名の使用理由が「**振り仮名を話させたい**」からか「**本文の言葉を使いたい**」からかの違いである。

既に出した例を振り分けると「^{デメエ}自分」「^つ痛」「^{レイズしろ}受けて立て」が前者に、「^{ぜったい}法王級」「^{デート}交尾」は後者に分類できる。それぞれの役割については既に述べたとおりであるが、もう少し詳しく言及しよう。

振り仮名が使用理由のパターンは、振り仮名による砕けた口語の表現が目的であることが多い。話者の個性を振り仮名で表現したもので、本文と振り仮名の言葉の意味が全く同じであればこちらに属することが多い。例えば「^{あいでいー}I D」(p281)という用例について言えば、これはもはや普通の振り仮名と解釈することも不可能ではないが、ここでの話者が科

学、技術用語についての知識が全くない登場人物であることを考えれば、これを「つたない言葉づかいの表現」として解釈するのが適当だろう。

また、「受^{レイズしろ}けて立て」のようにむしろ振り仮名の方が意味の通りにくいものもあり、これは登場人物に「洒落た」言葉を発声させた表現を求めたものだと考えられ、これらは振り仮名に表現の重点があるものだろう。

一方本文が使用理由のモノは、本文で話者の個性、認識が表現される。振り仮名と本文で全く意味の違う言葉が使用されることも珍しくなく、例に出したものはその有様が顕著なものである。こと話を『とある魔術の禁書目録』に限れば、この作品には主人公が属する SF の世界観とヒロインが属するファンタジーの世界観を両立させているため、言葉づかいにそれを反映させたいが、同時に読者や作中の話し相手にも意味の理解を求めなければならないため、本文でその世界観、現実との乖離性を表現し、振り仮名で補っているのである。

なぜこの二つを一つの形式としてまとめたのかということ、振り仮名に込められた詳しい意図を本文が担当しているという点は共通しており、加えて二つの境界が曖昧で、振り仮名と本文どちらに表現の重点が置かれているか、ということは読者によって認識が変わる部分も大きいと考えた。いわば上記の二つはどちらがより重要か、という程度の差とも言えるだろう。

次に 2 の形式だが、先ほども述べたようにこちらの用例は少なく、絶対にこの形式、と指摘できるものは「ご^ゴべ^{メン}な^なさ^{さい}い」(p159)という用例一つだけで、おそらく「借^{レン}り^{タル}てる」(p52)「お前^イん^ギト^{リス}コ」(p165)もこちらだろうという程度である。しかしながら本文が音声、つまり読みを担当するという一般的認識の役割から外れたこの事例は非常に興味深い。

発声語が本文であることが明らかな「ご^ゴべ^{メン}な^なさ^{さい}い」の例を詳しく説

明すると、これは発声者である主人公が土下座して顔を床に押し付けつつ声に出したものであり、そのため言葉がゆがんでしまったことを表したものである。つまり振り仮名は意味の補足、本来話者が言いたかった言葉を正しく表記したものなのだ。残りの2例についても、これほど顕著ではないものの同様のことが言える。

「^{レンタル}借りてる」の用例は「^{レンタル}借りてるビデオ」と本来続くもので、それが傷つけられそうなのを注意する場面のものである。つまり重要なのは「借りたもの」という事実であり、実際にそれを発声させたが「他人からではなく店からである」という限定の補足を振り仮名が行っているといえるだろう。「^{イギリス}お前んトコ」についても、話者が重要視しているのは「話し相手のところ(国)」であり結果的に「イギリス」というだけなのだ。

本文と振り仮名を入れ替えても変わらなさそうだが、この用法において振り仮名はあくまで補足であり、本文の発声に要点が置かれている。

台詞内の振り仮名は、やはり話者の性格や認識、状況についての表現、あるいはその補足の役割があるとまとめることができるだろう。

IV. 言葉の専門性について

～「ロンギヌスの槍」は誰でも知っている言葉か～

この項では、今までの注目点に対するものとは少々毛色を変え、『とある魔術の禁書目録』という作品の「ライトノベル」という書籍形態の一部の特徴が、振り仮名に役割を求めているものについて考えたいと思う。ライトノベルの特徴と言えば、会話文が多いことも特徴であり、前項に関わる特徴であったが、ここで指摘したい特徴は「使用する言葉の専門性」という問題である。

言葉にしにくいので実際に例を挙げると、「^{ネクロノミコン}死霊術書」(p44)「^{ロンギヌス}神殺し」

(p148)「^{サイコメトリー}読心能力」(p226、238)などの(特に振り仮名の)言葉である。これらの言葉はこの作品独自のモノではなく、既に存在する、ファンタジー、SF ジャンルの物語で度々登場するモノ、概念であり「ファンタジー用語」「SF 用語」という呼び方が相応しいものだろう。

現実には日常生活を送るなかで、私たちがこれらの言葉を使う機会はないと言い切ってしまうて構わないものだし、これらが一体何を指すのか、意味を全く知らない人も多数存在するはずである。だが、これらの「用語」は知らなくともさほど困らないとはいえ、作品内で幾度となく使用される。これはこの作品の想定する読者層が、これらの用語に対しある程度知識を持っているからである。

ライトノベルと呼ばれる書籍以外でみられないわけではないのだろうが、その多くでこうした「読者が持つ知識」をある程度見積もった言葉の使い方がされることがある。別のライトノベル作品からこの傾向が顕著なものを挙げると『ソードアート・オンライン』(川原礫 電撃文庫 2009.4)という作品で使用される「^{ヒットポイント} H ^{タンク} P」「壁仕様」「再湧出」などが用例として挙げられるが、これらは全てゲーム、それもオンラインゲームで使用される言葉である。「^{ヒットポイント} H ^{リポップ} P」はまだ理解できるかもしれないが、それ以外に関しては完全に専門用語と言えるだろう。この作品はオンラインゲームを題材とする小説ではあるが、これらの専門用語を使わなくとも表現のしようがあるはずなので、敢えてこれらの言葉を使用しているのだろう。

これらの言葉を使用するのは、当然作品の世界観、雰囲気を強固なものとするべく専門的な用語を使っているのだろうが、加えてこれらの作品の読者に「小説、アニメ、漫画、ゲーム」などに詳しく、それらを通してファンタジー、SF の知識をある程度持っている人間が多いという

ことがあるのだろう。これらの専門用語である振り仮名を大雑把に二つに分けると、

1. 専門用語の言い換え、別名の併記。
2. 用語が分からない人のことを鑑みて、本文には意味、振り仮名が用語、と分けている。

とすることができる。

1 の例として既に挙げた「死霊術書」^{ネクロノミコン}の他、「黄金夜明」^{S ∴ M ∴}(p38)などが『とある魔術の禁書目録』では使用されている。はっきり言って、単語だけ抜き出すとわからない人にはさっぱりわからない言葉であるが、「併記することでどちらかを知っている読者に何のことなのか伝わるようにする」機能が無いとは言えない。が、こちらは必ずしも読者に意味が通じることを求めるものではないと考える。文脈上、何の事だかわからなくとも読み進めることは可能であるし、そもそも「黄金夜明」^{S ∴ M ∴}などという表記は**まともに読むことを期待しているとは思えない**。むしろ振り仮名を振ることで、これらの言葉が「特殊な(専門的な)言葉である」ということを示した使い方であるといえるかもしれない。

次に 2 の例である。こちらは「神殺し」^{ロンギヌス}「読心能力」^{サイコメトリー}などが当てはまるだろう。注意して欲しいのは、こちらのパターンではいわゆる「専門用語」は振り仮名のみが担当していることである。振り仮名に漢字などの表意文字を使用するのは特殊ルビの例を以てしても少ないので、この分担は取り立てて言及することでは無いのかもしれないが、文脈上の意図に沿った言葉は振り仮名であり、その言葉を知らない読者は本文に目を向けてそこから大体の意味を読み取る用法である。この「振り仮名の補足を本文が行っている」という点で「固定関係、造語」の振り仮名の一部に近く、目的も「語意の理解と世界観に適応した呼称の両立」であ

る。実際、本文と固定関係があるとみなせるものも多数存在する。

想定読者層を推測できるようなある種の「用語」の振り仮名についてここまで扱ったが、意味を理解されることを前提としないような特殊な使い方も含まれ、あまり文字を連ねることなく作品の世界観、登場人物の属する世界の印象を読者へ定着させていくための働きが主たるものとまとめることができる。

V. 「その他」の振り仮名について

単語に対する振り仮名の考察そのものとしては最後になるが、「本文と振り仮名の関係」の分類で「その他」としたものについて触れておきたい。この分類は振り仮名の言葉が本文の言葉の「何」に当たるのかによって分けたものであり、理解しやすいもので訳語、同義語、抽象語、具体語、また作品の都合から口語、指示語(人称代名詞)、固定関係で結ばれたもの、という項目で振り分けていったのだが、少なくない数の、「いずれの項目でも説明できないもの」つまり「その他」が出てきた。

実のところ振り仮名の使用理由や役割という観点から述べれば、大体のものはここまで触れてきた項目のもので説明できる。ただ固定関係もなく、造語でなく、人に対するものでなく、台詞内でなく、専門用語でもないものが存在しないわけではないので、これら本文との関係が「その他」に属する振り仮名についても触れておきたい。

これらの振り仮名に共通する特徴を強いてあげるとすれば、「本文の言葉との純粋な意味上の関連性が低い」という点が考えられる。もちろん、関連性が低ければ「その他」になるかということそんなことは全くないのだが、^{オタクぶんか}「戦略物資」(p30) ^{ルール}「常識」(p42)といった言葉に関しては、非常に判別が難しい。

^{ラヴコール}「連絡網」(p24) ^{メルヘン}「絵本」(p89)のように、本文と振り仮名の語意に若干のつながりがあるものも「その他」としてしまっているし、「学生」^{バケモノ}(p65)「銭湯」^{ゴール}(p169)などは、文脈上同義語と言える例である。「幸福」^{であい}と「不幸」(共に p199,216)などという使用法は、完全にセットで使うことを目的とした表現である。

これらの使い方は、いわば「台詞」内の「洒落た言葉遣い」に近いものがある。というのも、『とある魔術の禁書目録』という作品に言え、地(ぢ)の文の立ち位置が視点人物をはじめとする登場人物に近く、その文章自体が台詞のような部分が存在する。ゆえに、これら台詞内の振り仮名で扱ったものの一部と近い性質の振り仮名が、地(ぢ)の文にもちらほら存在してしまっているのだと考える。

ただ、やはり言葉というものは非常に流動的なものであるし、振り仮名の歴史について簡単に説明した際にも触れたが、その機能は時代によってどうしても変化を余儀なくされる。そのため今回は無理矢理形式に当てはめて説明してしまった部分も多いが、このような表現がさらに多用されるようになれば、専用の分類を考える必要は当然出てくるだろう。いわば「その他」はそれぞれが独立するその場限りの特殊比喻表現を短くまとめたもの、とすることができるだろう。

VI. 文単位の振り仮名について

注目点ごとの振り仮名の役割に言及する項目としては最後になるが、文単位でまとめて振られているものについて考えてみたい。「文単位」という言葉を使っているが、正確に言うと「単語」という形で抜き出してしまうのが適当ではないと考えられるものをこの分類にしている。例えば「^イ思^メい^ー浮^ジかべなさい」(p137)が、「^イ思^メい^ー浮^ジかべなさい」であつたら単

語分類にしていた。この命令文のように、一つの言葉で文になってしまっているだけで、この例では台詞の口語だが、実質単語のモノと一緒に扱ってしまってよさそうなものが無いわけではない。

問題はこれ以外である。例えば「^{エリ・エリ・レマ・サバクタニ}神よ、何故私を見捨てたのですか」(p276)について言えば、これは振り仮名が十字架にかけられたキリストが叫んだとされるギリシア語であり、本文がその日本語訳である。有名な一文と言ってしまうでもいいかもしれないが、この作品ではそれを魔術の名称、つまり固有名詞として使用しているのである。

^{SqueamishBloodyRood}「吸血殺しの紅十字」(p105、117)もバトルものの話にはありがちな「技名」「魔術名」ではあり、この二つの例は「単語」扱いすべきなのかもしれないが、前者に関しては出典では当然文章であり、これを単語として扱うにはさすがに違和感があること、後者に関して言えば前の二つである^{AshToAsh}「灰は灰に」「^{DustToDust}塵は塵に」(p105、117)とひとまとまりであると考え、文単位とした。

何が言いたいのかと言えば、文単位の振り仮名表現は非常に特殊な、いわば強い創作性、ファンタジー性を発生させることが多い。「神よ～」の例はいわば決まり文句のような部分があり、ここでは作中独自概念の名称だが、引用と言ってもいいかもしれない。この引用に振り仮名を振る手法は他作品にも存在し、例を挙げると『神様のメモ帳』(杉井光 電撃文庫 2007.1)に「^{これが たったひとつの冴えたやりかた}It's the only NEET thing to do.」というものがある。これも元々はジェイムズ・ティプトリー・ジュニアの作品である『たったひとつの冴えたやりかた』(原題は『The Starry Rift』)に出てくる言葉をもじったものであり、引用の一つだといえるだろう。引用元が翻訳されていたり翻訳物であったりすると、翻訳されたものと原文(に類するもの)をルビとで併記することがあるようだ。今回挙げた

例では、その変則的なものが挙げられている。

さて、ここまで挙げてきた例は厳密に言えば「文」ではなかったかもしれない。残りの例は明らかに文章にまとめて振り仮名が振られているのだが、こちらは大雑把に言えば特殊な表現である。文に対する例の、p100、105、117 のものはそれぞれ「」で区切られて別々に記録をとっているが、ひとまとまりで考えるもので、p94 の例と合わせ、これらはファンタジー概念のひとつである、「魔法の呪文を唱えている」場面でその呪文自体に振り仮名が振られたものである。

この「呪文への振り仮名」は実のところファンタジーではあまり珍しくもない表現であり、他作品の例をここで羅列すると長くなるので表の文に対する振り仮名の次にまとめているが、タイトルだけ挙げると『レンタルマギカ～魔法使い、貸します！』（三田誠 角川スニーカー文庫 2005.9）『黄昏色の詠使い イヴは夜明けに微笑んで』（細音啓 富士見ファンタジア文庫 2008.1）『レジンキャストミルク 4』（藤原祐 電撃文庫 2006.6）から例として挙げている。ちなみに、各作品からひとまとまりのもの（つまり、一つの呪文の最初から最後まで）を一つずつデータに引用しており、これらの作品にはまだまだ同様の表現は存在する。このような振り仮名表現を使用する場合、その作品世界にとって呪文を唱えることが当然である場合が多いので、一つの作品に同様の表現が複数存在することが多々あり、それがシリーズ作品の場合、シリーズを通して同様の表現が出続けることもある。表に取り上げた例の長さや力の入りようを見ていただければその特殊さは伝わると思うが、例の一つとして取り上げた『黄昏色の詠使い』シリーズのように、この「呪文」のようなものが話のメインになっている作品さえ存在する。いわば、ファンタジーにおいてはよく目にする表現の一つとも言えるだろう。

こうした文章単位の振り仮名表現についても、唱える呪文として世界観に適合する文字をしようすると読者のほとんどにどんな意味なのか伝わらないので、ルビと役割を分担することで、「呪文の不思議さ、通常の文章との乖離性」を強調するとともに、全く理解できない言語を羅列するという事態を避けることが可能になっているといえる。(※10)

とはいえ、単なる利便性の追求のみならず、こうした「呪文を唱える行為」が存在するということは、とりもなおさず作品に戦闘要素が存在することに他ならず、そこに「格好よさ」を追求する工夫があることは否めない。この「格好いい」という価値観は単語に対する特殊ルビにも付随するようだが、ある種これらの特殊ルビ表現が存在すること自体に付加価値があるようだ。

(※10)このような呪文表現においては、より現実から「遠い」言語が実際に発声されているものとして意図されているはずである。その役割は振り仮名のみならず、本文が担う例(データ例では『黄昏色の詠使い』)も存在する。よってもとよりこの両者に優劣は存在せず、あくまで対等である。しかし、これらの表現を使用する作品がアニメ化など、音声を実際に伴うメディアになった場合は意味の通じる方が発声語として選択され、もう片方は完全に切り捨てられることが多い。結果として作者の表現したかったことを伝えきることはできないということなのだが、このような点である種文字媒体の表現上の「有意」性が証明されているとも言えるのではないだろうか。

VII. 振り仮名の使用法のまとめ

データを分類し、気になった点ごとにまとめ、振り仮名の役割、使用する理由について考えてきた。しかし細かくみていくと、使われた振り

仮名一つ一つに別の理由があるといえるだろうし、「その他」のようなものも存在しているのできっちりまとめるのは難しい。よって非常に大まかなまとめ方になってしまうが、強いてその役割として言及できるものを分けると、

- ・世界観、雰囲気、意味の強調、視点人物の認識等の理由から、**本文**で使いたい言葉」が存在し、それに対して読者の理解、あるいは作中の整合性を**補うために**特殊ルビが使用される場合。
- ・(主に発声される言葉として)世界観、雰囲気、発声者の設定との整合性等の理由から、使いたい言葉が存在し、そちらを**振り仮名**に担当させ、意味上の補足のために**本文と併記**させる場合。
- ・特殊ルビ表現を利用することで、その部分を強調あるいは特殊なものとして**読者に意識**させたい場合。

と、することができる。

本当に大まかな分類になってしまったが、これはデータ収集対象となった『とある魔術の禁書目録』一冊にのみ使用されている振り仮名でさえ、その用途が多岐にわたっているからである。しかも、取り上げやすい部分を取り上げて考えたにすぎず、特殊ルビの表現の底はまだまだ見えない。厳密に調査、考察を行うのであれば一例一例細かく行うのが妥当であるのだろうが、ここまですり仮名の持つ表現機能の存在や、その多様性は確認できたように思えるので、これ以上の細かい考察は行わない。次項では、これらの振り仮名の『とある魔術の禁書目録』という作品全般においてどう使われているかを確認したい。

6. 振り仮名の価値～『とある魔術の禁書目録』内での働き～

さて、この項では「振り仮名表現の価値」を考えるべく、『とある魔術の禁書目録』という作品そのものと特殊ルビの使用法との関係について、もう少し深く言及したい。

I. 特殊ルビを多用することによる影響

そもそもこの作品をデータ収集対象として選んだ理由は、前にも述べたが他作品を圧倒する量の特殊ルビ使用回数にある。ライトノベルに限定するならば、特殊ルビはジャンルを問わず使用され、ことファンタジー、SFとなれば、「多用する」作品は決して珍しいものではない。しかし、それでも『とある魔術の禁書目録』の特殊ルビ使用頻度は群を抜いている。**(※11)**また先にも述べたことだが、同作者の別作品ではこのような特殊ルビの多用はみられないため、『とある魔術の禁書目録』で意図的に特殊ルビを多用しているのだと考えられる。何故このように特殊ルビを多用するのか、「多用すること」そのものに意味がある可能性と、それに付随する影響を考えたい。

「多用することの意味」について、作品が執筆された背景から注目してみると、この『とある魔術の禁書目録』という作品は作者である鎌池和馬が第9回電撃ゲーム小説大賞(2002年度)三次選考にて落選した際、その作品が後の担当編集の目にとまり、そのあとに書きあげた作品で、つまりは彼のデビュー作品である。鎌池一馬はデビュー時、ライトノベル作品の賞を受賞した経験のない全く無名の新人であった。**(※12)**これが何を示すかということ、本作あとがき p297 に鎌池和馬自身が「二巻も出せますようにと祈り」と記している**(※13)**ことからわかるように、この1巻執筆時点では二巻が出せるかどうか未定であり、売れ行きによっては出版されないこともありえた、ということである。

人気、売り上げに作品が左右されるのはライトノベルに限ったことでなく、当然のことである。特にジャンルがファンタジー、SF バトルの話はテーマ自体、あまり特異なものであるとは言えず、特別興味を引くものではない。故に他作品と十把一絡げにされないためには読者の目にとまる印象に残る特徴が必要であり、そのための手段の一つとして特殊ルビが選ばれた可能性がある。つまり、これを求めて作品内で特殊ルビを多用し、特殊ルビが作品内で発揮する表現効果などとは別に、使うこと自体が目的であったかもしれないということが考えられるのである。

ライトノベルのバトル作品が特殊ルビと親和性が高いのは確かだが、上記のような可能性もあり、ここまで多用するのはある程度意図的に行ったことなのだろう。当然、ここまで振り仮名を多用することによる作品への影響は大きく、それが必ずしも良いものばかりとは限らず、リスクも当然存在する。

リスクの内容を挙げれば、第一に、振り仮名が多用されているということとはところどころで文章が二行に分かれているということである。文章のあちらこちらで小さな文字が併記されているのは、あまり見栄えのいいものではない。第2項のIで、今回の研究において傍点は振り仮名に含めないことにしたが、こちらについても作中125カ所にわたり使用され、加えて一文丸ごと付点されることも少なくないため、少々煩雑な印象を受ける。「注目すべきである」と示すものが多いあまり読者が倦怠感を覚え、特殊ルビを読み飛ばしてしまうことも多くなるかもしれない。多用することで、「一つ辺り」の振り仮名表現が持つ重要性や、読者に与える印象が薄れてしまうのは避けられないだろう。

また、これらの表現は作品の雰囲気、言葉を選んだ使用が多いので、大分「格好つけた」「洒落た」ものであるという印象を受ける。そのため

文章のもつ「アク」つまり「個性」が強く、何度も使用されると読んでいて食傷気味になってしまう。加えて振り仮名が持つ「読みの補助」のイメージが強いいためか、それが多いと読者に対して過保護、いわば文章が「幼い」ものに見えてしまう。

どちらも現在のところ、読者が振り仮名表現を多用する作品を読む場合に持つことは避けられない印象であり、作者側も認識していたことだとは思いますが、これらのデメリットを抱えてでも特殊ルビを多用することによるメリットをとったということになり、それこそが作品の「個性」であるともいえる。しかし念のため指摘しておく、ここで挙げた点は「振り仮名の表現機能」に直接関係するものではない。しかし、特殊ルビは現状、「多用すること」それ自体に表現上の意味があり、作品に影響を与えることを踏まえておきたい。

(※11)種類数しか調べてないが、一冊あたり 100 種類以上の作品は少ない。『境界線上のホライゾン』も特殊ルビが多い作品だが、ページ数が最も少ない「I 上」でさえ 594 ページと『禁書目録』の倍で、100 種類を超える程度である。

(※12) 長くなってしまうが、作者である鎌池和馬氏について補足しておきたい。男である以外詳しい情報は公表されていないのだが、その執筆の特徴として「執筆速度が速い」ということがあげられる。それは担当編集者に「めっちゃめっちゃ書くの早いんですよ」「編集者の方が、原稿読むのが間に合わないんですよ(笑)。」(『とある魔術の禁書目録ノ全テ』 p 142)と評されるほどであり、デビューからの 92 カ月の間に文庫本だけで 33 冊も出していることから明白である。この速度の根本には作者本人の執筆に対する高いモチベーションがあると考えられ、「趣味は小説」と言われ(同 p 133)、休日は「原稿書いたり資料探したり」、「何か手を動

かしてるともう次の話が出てきちゃうんですよね早く続きを書きたいって」(同p 142)と発言しているように、あまり難産型の作者ではないようだ。この事実を見ると、わざわざ作品に特徴を付けるべく特殊ルビを多用した可能性は必ずしも大きくはないのだが、否定しきる要素も存在せず、意図的に多く使用しているであろうことも事実なため、記した。

(※13)あとがきが執筆されたのは2003年12月26日である。(p297)

Ⅱ. 振り仮名の表現機能の持つ価値

最後に特殊ルビ表現の持つ機能を『とある魔術の禁書目録』が作品全体でみてどのように利用しているのかを考えたいと思う。

端的に言って、特殊ルビ表現を利用することによって得られる最大の利益は、一単語一文相当の空間に対し、実質倍の情報を込めることができるという点にあると私は考える。元々一般的な振り仮名にしても、「意味を担当する漢字」と「読みを担当する振り仮名」という二つの役割を分担させる使用法と解釈することができ、その応用形として「話者の意図を本文に、通じる言葉を振り仮名に担当させる」など、作品を展開していくうえで書き手の都合がよいように担わせる役割を拡大した用法が特殊ルビ表現である、と言えるのではないだろうか。

振り仮名に担当させる役割に影響を与える作品要素について述べれば、まず振り仮名の役割について論じた際に何度も触れた「作品の世界観」である。あらすじの部分でも述べ、ここまでに幾度か触れているが、この『とある魔術の禁書目録』という作品は、超能力が存在するSFの世界観と魔術が存在するファンタジーの世界観を少なくとも一卷の時点では融合させることなく同時に描いている。(※14)先にも述べたように、特殊ルビによる表現は世界観や登場人物の認識を読者に理解してもらうべく使用されることが多い。造語や専門用語といった、特殊ルビと親和

性が高いと考えられる言葉が、使用されやすい作品内世界を二種類、初めから抱えているのであり、当然ファンタジーのみ、SFのみの世界観を持つ作品よりは特殊ルビが多用される傾向にあると言え、振り仮名の多さの根本的理由と考えられる。この点について「ファンタジー世界観」と「SF 世界観」を本文と振り仮名で分ける使用法が、その両立を容易にしている。

次に「登場人物」という要素にも着目したい。シリーズ全体でみると番外編含め30冊近く出版されていることもあり、その数は非常に多い。加えて作品としての特徴か、初登場の巻以降で再登場する登場人物多いため、巻が進むごとに「ストーリーに絡んでいる人物」の数が肥大化していく。結果として最近刊行されたものはもはや群像劇に近いのだが、これは登場人物一人あたりに強い個性を付けなければ読者の頭がこんがらがってしまう可能性を多分に秘めている。その対応として作中に見られる工夫が「地の文において人称代名詞の使用を少なくすること」と「口調に差異をつけること」である。これらの特徴は一卷からみられ、特に後者については口癖、口調に加え、「その人物が属するファンタジー、SF 世界の常識」を大きく反映させるため、振り仮名が無ければ読者あるいは作中の話し相手にも言葉が通じるか危うい部分もある。これは最初に挙げた特徴である世界観にも通じるが、登場人物にわかりやすい個性をつけることにも一役かっているものと考えられる。つまり多数存在する作中の登場人物が個性的な話し方のまま、会話を成立させられるように、「話し手の言葉」と「聞き手に理解できる言葉」を分担させる使用法が考えられるということである。

この人と人との理解補助効果をもっと広げ、作品外へ効果を持つものを含ませるようにすると「作中内話者(視点人物、地の文含む)が使用し

た言葉」と「被使用者(読者含む)が理解するための言葉」という形にまとめることが可能だろう。

私が指摘していないだけで、他にも分担役割はあるのだろうが、この特殊ルビ表現は両極の立場にあるものを両立させ、『とある魔術の禁書目録』は、この効果を存分に受けて作品を形作っている。そうして第5項で挙げたような役割を担わせたうえで、作品独自の色を形にしていると言えるだろう。ことストーリーについては、「主人公の男の子が女の子を助ける」という非常にスタンダード、悪く言えば使い古されたありがちな話ではあるが、この用法を大いに利用することで、回りくどい説明、補足や作中世界を掘り下げることによる文量を減らし、文章が冗長になることを避け、「ライトノベル」という一つの媒体が求める、読みやすく、手軽に楽しめる作品となることに成功している。

勿論、作者が『とある魔術の禁書目録』に対して行っている工夫が私の挙げたものしかないなどということはない。しかし作者が様々に行った「工夫」の一つとして特殊ルビ表現が存在し、作品に確かな影響を与えていることは否定しえない事実である。よって『とある魔術の禁書目録』という作品において、特殊ルビとは作品を形作るうえでの重要な要素の一つであり、特徴そのものなのである。

(※14) 作品内でS F世界は常識的な存在で、ファンタジー世界は一般に認知されていない。巻によって舞台がどちらの世界であるかは変わるが、一巻はS Fの街で魔術師と戦う話がメインである。

7. おわりに

振り仮名が少ない文章スペースに多くの情報を込めることができる利点を持つことは既に述べたとおりである。故にこのような表現は創作物

のみならず、語意を補足する意図で論文でも使用される。今はまだ
正式でない
カジュアルな印象をもつ表記ではあるが、併記という形で説明をまとめ
られるので文章が煩雑になるのを避けることができるだろう。語意に対
する補足で一回一回「カジュアルな(正式でない)」のような説明が加え
られると、読み手にとっても話の流れが断ち切られるように感じるに違
いない。

今回は表現の、それもごく一部の作品に関わる特殊ルビだけを取り上
げて論じたが、それでも作者が心血を注いだ取り組みであり、確かな影
響を作品に与えていた。振り仮名が、その歴史について述べたときの
ように、見た目、教育面の問題を抱えていることは間違いない。とはい
えこの文章技法は日本の文章に関わる存在の工夫の結晶であることも、
また間違いのない事実である。そして、この拙い論の中で述べてきたよ
うに今もその役割を進化させ続けている。よって、振り仮名表現の価値
を明確に規定するのは難しいが、不要と断ずることなどあってはならな
い。振り仮名とは読者、作者片方のだけのために存在するということ
はありえない。しかしながら、漢字の読みを示すという読書補助的意味合
いが中心であるため、出版社の意向、読者のための存在という側面が強
まってしまったのかもしれない。故に、振り仮名が多くて「読みにくい」、
読みを示すことが「過保護に過ぎる」という考え方がなされたのだと思
う。しかし、今回調査したように、振り仮名は書き手側が使いたい言葉
を使うことを助ける存在でもある。振り仮名が文章表現の確かな一つの
形である、ということが常識的な考え方になれば、補助的な役割をする
からと言って文章全体における重要度は本文と何ら変わることはない
という事実が認識されるだろう。これからも振り仮名とその表現は、文章、
日本語の変化とともにある大事な一部であり続けるに違いない。

・文字数

1 ページ当たり 32 字×25 行=800 文字

800 字×45 ページ=およそ 36000 文字(正確には 32782 字)

・調査対象書籍(比較対象・引用作品)

鎌池和馬『とある魔術の禁書目録』アスキー・メディアワークス 2004.4

三田誠『レンタルマギカ〜魔法使い、貸します!』角川書店 2004.9

藤原祐『レジンキャストミルク 4』アスキー・メディアワークス 2006.6

さざね
細音啓『黄昏色の詠使い イヴは夜明けに微笑んで』富士見書房 2007.1

杉井光『神様のメモ帳』アスキー・メディアワークス 2007.1

鎌池和馬『ヘヴィーオブジェクト』アスキー・メディアワークス 2009.10

川上稔『境界線上のホライゾン I 上』アスキー・メディアワークス 2008.9

川原礫『ソードアート・オンライン 1 アイंकラッド』

アスキー・メディアワークス 2009.4

・参考文献(書籍)

今野真二 『振仮名の歴史』 2007 集英社

『このライトノベルがすごい! 2010』 2009 宝島社

榎本秋 『ライトノベル文学論』 NTT 出版 2008

一柳廣孝、久米依子 『ライトノベル研究序説』 青弓社 2009

新城カズマ 『ライトノベル「超」入門』

ソフトバンククリエイティブ 2006

電撃文庫編集部編『とある魔術の禁書目録ノ全テ』

アスキー・メディアワークス 2007

・参考文献(論文)

新藤咲子 1982 ふりがなの機能と変遷

『講座日本語学 6』 p228～254 明治書院

岩淵匡 1988 振り仮名の役割

『講座日本語と日本語教育 9』 p58～86 明治書院

細川英雄 1989 ふりがな—近代を中心に—

『漢字講座 4』 p 201～224 明治書院

大島中正 1989 表記主体の表記目的からみた漢字仮名並列表記形式

: いわゆる振り仮名付き表記形式をめぐって

『同志社女子大学学術研究年報 40(4)』 p440～454

内山和也 1996 振り仮名の 12 の機能とその分化

『日本語表現法論攷』 p230～241 溪水社

黒木和人 1998 「ふりがな廃止論」の理念と実践:山本有三の改版作業から

『言語科学論集 2』 p13～14 東北大学文学部日本語学科

田島優 1998 振り仮名と漢字表記の関係の処理について

『日本語の文字・表記』 p89～97 研究会報告論集国立国語研究所

内山和也 2003 振り仮名表現の諸相

『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部 51』 p301～309

文化教育開発関連領域